

公開資料

平成30年度

# 全国学力・学習状況調査結果

平成30年4月17日実施



我孫子市立並木小学校

## ○小学校国語＜H30 並木小学校＞

- 国語A(主として知識)について、本校の平均正答率が県70%、全国70.7%を上回っている。物語を書く時の文章の構成の工夫を考えたり、説明文を読んで目的に応じて必要な情報を捉えたりすることができる児童が多い。
- 国語B(主として活用)について、本校の平均正答率が県53%、全国54.7%を上回っている。目的や意図に応じて、文章全体の構成を考えたり、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながらい読んだりすることができる児童が多い。

## ○課題等

### 話すこと・聞くこと

- ◇(A) 相手や目的に応じて、自分が伝えたいことについて、事例などを挙げながら筋道を立てて話すことができる児童が多い。
- ◆(B) 話し合いの参加者として、質問の意図を捉えることに課題がある。
- ◆(B) 話し手の意図を捉えながら聞くことに課題がある。

### 書くこと

- ◇(A) 自分の想像したことを物語に表現するために、文章全体の構成の効果を考えることができる児童が多い。
- ◆(B) 話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめることに課題がある。

### 読むこと

- ◇(A) 目的に応じて必要な情報を捉えることができる児童が多い。
- ◇(B) 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながらい読むことができる児童が多い。

### 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

- ◇(A) 学年別配当表に示されている漢字を正しく読んだり、書いたりすることができる児童が多い。
- ◆(A) 文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くことに課題がある。
- ◆(A) 相手や場面に応じて適切に敬語を使うことに課題がある。

※今回の学力調査のA問題では、全国平均と比べ、全体的に無解答率の割合が低かった。B問題では、問題形式が記述式の問題ではやや無解答率の割合が高い設問もあったが、選択式の問題では無解答が少なかった。

◇…全国平均と比較してよくできている点 ◆…課題のある点 ( ) の記号は、A=国語A、B=国語B

## ○指導改善のポイント

### 話すこと・聞くこと

○目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように話すことができる児童が多い一方、話し手の考えや質問の意図を捉えながら話を聞くことには課題がある。朝の会のスピーチや国語の学習の中で話す活動を取り入れている学級は多いが、聞き手の児童に漠然と話を聞かせていることがほとんどである。要点をメモしながら聞き取らせたり、感想を言わせたり、質問をさせたりする聞き手側の活動を意図的に設定していく必要がある。また、国語の学習だけでなく、算数や他の教科の学習でも意図的な対話を取り入れた授業を展開し、対話的な学び、深い学びを実現していくことが大切である。

### 書くこと

○「聞くこと」の課題同様、話し手の考えや質問の意図を捉えながら話を聞き、自分の意見と比べながら考えをまとめて文章に書くことに課題がある。国語の学習だけでなく、全校朝会での校長先生の話や行事（例えば、「平和教育リレー講座」や「仕事を聴く会」など）での話などを聞いて、自分の考えを書く活動を取り入れていくことが効果的である。

### 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

○漢字の読みや書き取りなどの力がついてきている。引き続き、高学年では朝学習、中学年、低学年ではなみきっずタイム等を利用して、新出漢字の学習やドリルを使った反復練習に取り組みさせていきたい。また、漢字検定など外部の検定なども利用していきたい。家庭での反復練習も啓発していく。

○児童の書いた文章を読むと主語と述語がねじれていることがよくある。まちがいを教師が直してしまうのではなく、児童自身が推敲する活動を大切にしたい。自分自身で書いた文章を読み直したり、友達同士で読み合ったりする活動を積極的に取り入れて、丁寧に読み返す習慣をつけていきたい。

○敬語を使う際には相手と自分との関係やその場の状況を意識して、適切に使うことが求められる。特に尊敬語や謙譲語の使い分けは難しい。今回の調査でも身内が主語の時に尊敬語を使ってしまう間違いが多かった。よく使う尊敬語、謙譲語については重点的に指導し、普段から時と場に応じた敬語を使う活動を大切にしていきたい。

例：行く⇒いらしゃる（尊）⇒うかがう（謙）  
食べる⇒めしあがる（尊）⇒いただく（謙）  
話す⇒おっしゃる（尊）⇒申し上げる（謙）

具体的には、地域の人や保護者などに関わる学校行事などにおいて、話をしたり、案内の手紙を書いたりすることが考えられる。その際に、相手と自分との関係を意識しながら敬語を使うことに慣れるように指導することが大切である。

## ○小学校算数＜H30 並木小学校＞

- 算数A(主として知識)について、本校の平均正答率が県62%、全国63.5%を大きく上回っている。「量と測定」「図形」の領域はよく理解できている児童が多い。「数と計算」「数量関係」の領域では、単位量あたりの大きさを求める問題場面を数直線で表すことに課題がある。
- 算数B(主として活用)について、本校の平均正答率が県51%、全国51.5%を大きく上回っている。すべての領域についてよく理解できている児童が多い。しかし、グラフを読み取り、考察することにやや課題がある。

## ○課題等

### 数と計算

- ◆ (A) 1に当たる大きさを求める問題場面における数量の関係を理解し、数直線上に表すことに課題がある。
- ◇ (B) 示された情報を解釈し、条件に合う時間を求めることができる児童が多い。
- ◇ (B) 示された考え方を解釈し、ほかの数値の場合を表に整理し、条件に合う時間を判断することができる児童が多い。

### 量と測定

- ◇ (A) 単位量あたりの大きさを求め、混み具合を比べる式の意味を理解している児童が多い。
- ◇ (A) 分度器の目盛りを読み、180度よりも大きい角の大きさを求めることができる児童が多い。
- ◇ (B) 図形の構成要素や性質を基に、集まった角の大きさの和が360度になっていることを記述できる児童が多い。
- ◇ (B) 黒板に輪飾りをつけるために折り紙の枚数が100枚あれば足りる理由を、示された数量を関連付け根拠を明確にして記述できる児童が多い。

### 図形

- ◇ (A) 空間の中にあるものの位置を表現することができる児童が多い。
- ◇ (B) 合同な正三角形で敷き詰められた模様の中に、条件に合う図形を見出すことができる児童が多い。
- ◇ (B) 図形の構成要素や性質を基に、集まった角の多き和の和が360度になっていることを記述できる児童が多い。

### 数量関係

- ◆ (A) 1に当たる大きさを求める問題では、除数が小数である場合でも除法を用いることの理解に課題がある。
- ◇ (A) 折れ線グラフから変化の特徴を読み取ることができる児童が多い。
- ◇ (A) 百分率を求めることができる児童が多い。
- ◆ (B) メモの情報とグラフを関連付け、総数や変化に着目していることを解釈し、それを記述することに課題がある。

◇…全国平均と比較してよくできている点 ◆…課題のある点 ( ) の記号は、A=算数A、B=算数B

## ○指導改善のポイント

### 数と計算

- 問題場面的に的確に捉え、数量の関係を図や数直線などに表すことは、問題を解決する上で大切である。本校の算数の研究でも、自分の考えをわかりやすく視覚化して問題解決すること。それを示しながら相手に伝えて、対話を効果的に行うことに重点を置いた授業改善を行っている。今回の課題の指導にあたっては、例えば、0.4mの重さが60gの針金の1mの重さを求める問題場面において、テープの図と数直線を用いて、0.4mに当たる重さが60gであることなどを確認する活動が考えられる。テープの図を基に長さに対応した場所に重さの数字を、かく活動を取り入れていきたい。
- 小数の除法の意味についての理解をみる「答えが $1.2 \div 8$ で求められる問題を選ぶ」設問では、本校の正答率は全国平均を上回っているが、42.2%であり、半分以上の児童が正しく答えることができなかった。除法の意味は3年から学習している。小数の除法の意味については、5年生で学習する。除数が1より小さい小数である場合でも除法を用いることを理解できるようにする。指導にあたっては、問題場면을図や数直線などに表し、数量の関係を的確にとらえ、立式する活動が考えられる。割合に当たる大きさを求める場合には乗法が用いられ、1に当たる大きさを求める場合には除法が用いられることを理解できるようにすることが大切である。
- 九九表の横に並んでいる数を選び、選んだ数について法則を見いだす設問の正答率が全国平均をやや下回った。数量の関係を帰納的に考察し、見いだした数量の関係を、式を用いて表現することができるようにすることが大切である。  
本校の2年生が $7 \times 8$ の答えを $3 \times 8 + 4 \times 8$ のように分配法則を用いて求める研究授業を実践した。交換法則や分配法則、結合法則などをただ暗記させるのではなく、実際の問題解決に積極的に取り入れ、そのよさを実感させたい。

### 図形

- 円周率の意味や、直径の長ささと円周の長さの関係についての理解をみる設問では、本校の正答率は全国平均を上回っているが、45.8%であり、半分以上の児童が正しく答えることができなかった。円周率が、円の直径に対する割合であることを理解できるようにすることが大切である。指導にあたっては、例えば、身のまわりにある円の形をしたものについて、円周の長さや直径の長さを測定し、円周の直径に対する割合を調べる活動が考えられる。知識として円周率を教えこむのではなく、数学的活動を通して気づかせることが大切である。その際、直径の長ささと円周の長さの関係に着目し、円周の長さが直径の長さの何倍になるのかについて見通しをもつことができるようにすることが大切である。このような活動を通して、直径の長さが変わっても、円周の直径に対する割合が一定であり、「円周率＝円周の長さ÷直径の長さ」であることを理解できるようにする。

### 数量関係

- グラフの特徴を複数の観点で捉えて、情報を読み取ることができるようにするために、他者が読み取った情報や観点をグラフと関連付けて解釈することができるようにすることが大切である。指導にあたっては、読み取った図法を、総数や変化といった観点で分類し、それぞれの情報について意見を出し合う活動が考えられる。その際、グラフのどの部分に着目して情報を読み取ったのかを説明し合うことで、他者が読み取った情報とグラフを関連付けて解釈することができるようにすることが大切である。

## ○小学校理科<H30 並木小学校>

- 主として知識について、本校の平均正答率が県79%、全国78%を上回っている。  
堆積作用について、科学的な言葉や概念を理解している児童が多い。
- 主として活用について、本校の平均正答率が県57%、全国56.2%を上回っている。  
食塩水を熱する実験結果を通して導きだす結論を書くことができる児童が多い。  
流水実験の結果を基に分析して考察し、その内容を記述することに課題がある。

## ○課題等

### A区分 物質

- ◇ろ過の適切な操作方法を理解している児童が多い。
- ◇海水と水道水を区別するための2つの異なる方法の実験結果を分析して考察することができる児童が多い。
- ◇食塩水を蒸発させる実験の結果を基に分析し、問題に正対したまとめができる児童が多い。

### A区分 エネルギー

- ◇乾電池のつなぎ方を変えると電流の向きが変わることを実際の回路に適用できる児童が多い。
- ◇電流の流れ方について、予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できる児童が多い。
- ◆太陽の1日の位置の変化と光電池に生じる電流の変化の関係を目的に合ったものづくりに適用することに課題がある。

### B区分 生命

- ◇安全に留意し、生物を愛護する態度をもって、野鳥のひなを観察できるよう方法を構想できる児童が多い。
- ◇鳥の翼と人の腕のつくりについて調べた結果をについて考察する際に、問題に対応した視点で分析できる児童が多い。

### B区分 地球

- ◇上流側の天気と下流側の川の水位の関係について、複数の情報を関係付けながら、分析して考察できる児童が多い。
- ◆川の増水による土地の変化を調べる実験の結果を基に分析して考察し、その内容を記述することに課題がある。

## ○指導改善のポイント

### A区分 エネルギー

○太陽の1日の位置の変化と光電池に生じる電流の変化の関係を目的に合ったものづくりに適用することに課題があった。学んだことを基にしたものづくりへの適用ができるようにするためには、ものづくりの目的や獲得した知識をものづくりにどのように活用するかを明らかにするとともに、できたものが目的にあったものになっているかを振り返り、設定した目的に対して、計測し、制御する学習活動を保障することが大切である。

指導にあたっては、例えば、設定したものづくりの目的に対し、必要な知識を明らかにすることが大切である。その際、複数の領域や単元で獲得した知識を適用することも考えられる。これまでに獲得した知識として、「時間経過による太陽の位置や動き」と、「光が当たったときに発電する光電池の性質」を児童が想起し、ものづくりへ適用できるようにすることが大切である。

また、獲得した知識の適用だけでなく実際につくりながら、試す中で調節が必要で、実際の発電状況を計測して、くり返し試しながら光電池の置き方を制御するといった学習活動が考えられる。

### B区分 地球

○川の増水による土地の変化を調べる実験の結果を基に分析して考察し、その内容を記述することに課題があった。流水実験で一度に流す水の量を増やしたときに、溝の曲がっているところの外側と内側の両側とも棒が倒れているにも関わらず、外側だけがけずられている選択肢を選んでいる児童が多かった。このことから、実験結果を基に分析して考察することができていないと考えられる。このように解答した児童は、川の曲がっている外側は流れが速く浸食の働きがよく見られ、内側では流れが遅く堆積の働きがよく見られるという、これまでの学習を通して獲得した知識を基に解答していると考えられる。

実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できるようにするためには、観察や実験の結果を基に「事実」と「解釈」の両方を示しながら、説明できるようにすることが大切である。

指導にあたっては、自分の予想にとらわれずに事実と解釈の両方を表現することで、よりの確な説明になることを捉えられるように指導することが大切である。また、解釈した内容が問題と正対しているかを確認するなどの学習活動が考えられる。

# 児童質問紙から見えてくる並木っ子児童像

平成30年4月17日実施

## 基本的生活習慣

- 朝食を毎日食べているかの質問に対し、96%の児童が「食べている」「どちらかといえば食べている」と回答し、全国平均とほぼ同じ割合であった。
- 家の人と学校での出来事について話をするかの質問に「話をする」「どちらかといえばする」と回答した児童の割合は約70%で、全国平均を約10ポイント下回っている。

基本的生活習慣を身に付けている児童の割合はほぼ全国平均レベル。家族での会話は、全国平均と比べ少ない傾向にある。

## 家庭学習の習慣(学習時間等)

- 家で、自分で計画を立てて勉強しているかの質問に対して、「している」「どちらかといえばしている」と回答した児童の割合は、約47%で全国平均を20ポイント以上下回っている。
- 家で、学校の宿題をしているかの質問に対して、「している」「どちらかといえばしている」と回答した児童の割合は、約99%で全国平均とほぼ同じである。
- 家で、授業の予習・復習をしているかの質問に対して、「している」「どちらかといえばしている」と回答した児童の割合は約45%で、全国平均を約18ポイント下回っている。
- 学校の授業以外に1日2時間以上学習していると回答した児童の割合が約35%で全国平均を約6ポイント上回っている。一方で全くしないと回答した児童の割合は、約17%で、全国平均を約10ポイント上回っている。

本校の児童の家庭学習の状況を分析すると、比較的長時間学習している児童と全く学習していない児童に大きく分かれている。宿題には取り組むが、自分で計画を立てて学習したり、授業の予習や復習をしたりする児童は、全国平均に比べてとても少ない。比較的長時間学習している児童の多くは塾などで学習していると考えられ、自分で計画して自主的に学習している児童がとても少ないことがわかる。

## 主体的・対話的で深い学びの視点による学習の取組状況

- 5年生までの授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいたかの質問に対し、「取り組んでいた」「どちらかといえば取り組んでいた」と回答した児童の割合は、約71%で全国平均を約6ポイント下回っている。
- 自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたかの質問に対し、「発表していた」「どちらかといえば発表していた」と回答した児童の割合が約45%で全国平均を約16ポイント下回っている。



- **学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うか**の質問に対し、「思う」「どちらかといえば思う」と回答した児童の割合は約74%で全国平均を約4ポイント下回っている。

「主体的・対話的で深い学び」の実現のために授業改善に取り組んできたが、自分の考えを工夫して発表したり、対話から自分の考えを深めたり、広げたりすることには、依然として課題がある。さらに「対話的な学び」の充実に向け、校内研究を進めていく必要がある。

### 規範意識, 自己有用感 等

- **自分には、よいところがあると思うか**の質問に対し、「思う」「どちらかといえば、思う」と回答した児童の割合は約80%で全国平均を約4ポイント下回っている。
- **人の役に立つ人間になりたいか**の質問に対し、「なりたい」「どちらかといえばなりたい」と回答した児童の割合は約92%で全国平均を約3ポイント下回っている。

自分にやや自信がなく、将来の夢や目標を持っている児童もやや少ない。児童一人ひとりのよさを認め、そのことを児童が感じられるように働きかけ、自信を持たせていく必要がある。

### 算数の学習に対する興味・関心や授業の理解度等

- **算数の勉強は好きか**の質問に対して、「好き」「どちらかといえば好き」と回答した児童の割合は約51%で全国平均を約13ポイント下回っている。
- **算数の授業で新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたいと思うか**の質問に対して、「解いてみたい」「どちらかといえば解いてみたい」と回答した児童の割合は約49%で全国平均を約25ポイント下回っている。
- **算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えるか**の質問に対して、「考える」「どちらかといえば考える」と回答した児童の割合は約54%で全国平均を約24ポイント下回っている。
- **算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えるか**の質問に対して、「考える」「どちらかといえば考える」と回答した児童の割合は約51%で全国平均を約13ポイント下回っている。

「生き生きと主体的に学ぶ児童の育成」を目指して、算数の研修を行ってきたが、児童の学習意欲が向上していない結果が明らかになった。新しい課題に対して解いてみたいと思う児童は全体の半分しかない。仮説①の導入での「問い」の持たせ方に課題が残る。また、学習したことを実生活と結びつけて考えさせたり、生かしたりさせて深い学びにつなげていきたいと考えてきたが、その点についても大きな課題が残る。さらに具体的な手立てを考えながら、全校で授業改善に取り組んでいく必要がある。